

所属・資格 英文学科・准教授

申請者氏名 一條 祐哉

研究課題		事象命題と非事象命題の認知言語学的考察
報告の概要	研究目的 および 研究概要	英語の be to 構文には、以下のように様々な意味がある。 (a) The President <i>is to</i> visit Nigeria next month. (予定) (b) We <i>were to</i> shoot at anything that moved. (命令) (c) Fresh pasta <i>is to</i> be eaten fresh, not frozen. (適切さ) 今回の研究ではそれぞれの意味の認知的動機づけと意味の拡張の仕方、そしてこの構文が事象命題・非事象命題の関係にどのように関わるのかを考察対象とした。
	研究の結果	be to 構文の意味は大きく分けて時間的意味（確定的未来）と論理的意味（論理的帰結）の2種類あり、これらは中心的意味からメタファー拡張していると分析した。そしてこれらの意味は不定詞マーカー to のもととなっている前置詞 to 自体にあるため、部分の意味から十分に予測できると結論づけた。また本構文は進行文のように中核命題の内容を変化させる文法的機能を持った構文であることも考察した。
	研究の考察・反省	be to 構文と事象命題・非事象命題の関係性については十分に考察できなかったため、今後の課題としたい。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究成果物 テーマ 「be to 構文の意味拡張」 誌名 『英文学論叢』 巻・号 第67巻 発行年月日 平成31年3月31日 発行所・者 日本大学英文学会	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者		